

Title	I. L. マーコヴィッツ著『レオポルド・セダール・サンゴールとネグリテュードの政治』
Sub Title	I. L. Markovitz : Leopold Sedar Senghor and the politics of negritude
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.2 (1971. 2) ,p.125- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710215-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Irving Leonard Markovitz,

Leopold Sédar Senghor and the Politics of Negritude

New York: Atheneum, 1969, viii+300pp.

I・L・マーコヴィッツ著

『レオポルド・セダール・サンゴールと

ネグリテュードの政治』

一、哲学者、詩人、政治家、……現代アフリカの指導者のうちで、サンゴールほど多くの顔をもつた人物はほかに見あたらないであろう。しかもその「多くの顔」は、いずれも第一級の人物のそれにふさわしい輝きをもっている。

しかしながら、第二次大戦後、セネガルの代表としてフランス第四共和制のための制憲会議に参加し、一九四六年フランス下院議員に選出されて、「政治家としての顔」が前面に押し込まれ、さらに一九六〇年セネガル共和国大統領に就任してからは、同国ばかりでなくアフリカ全体でもトップ・リーダーの一人として認められ

るにいたつて⁽¹⁾いる。

ところで政治家としてのサンゴールの重味を増したのは、やはりかれが主張するネグリテュード概念、およびそれを土台とするアフリカ社会主義のイデオロギーであろう。サンゴールが「黒人民族を、あるいはヨリ正確にはニグロ・アフリカ世界を特徴づける文明的——文化的、経済的、社会的、政治的——諸価値の総体」として定義するこのネグリテュード概念は、かれのもつ伝統への志向性をはつきりと物語っているが、さらにサンゴールによればこのネグリテュードがもつとも重要な属性は人道主義であり、そのゆえにまたかれのいうアフリカ社会主義も「社会主義的人道主義」と評される⁽³⁾(C・F・アンドレイン)のである。

さて、本稿で紹介するマーコヴィッツの『レオポルド・セダール・サンゴールとネグリテュードの政治』は、このネグリテュードに照明をあてながら、「サンゴールの理念と政治との関係を究明し、かれの理論と価値とがセネガルの政治・社会状況に対して適切であるのかどうかを論じよう」とする野心作である。著者マーコヴィッツはベンシルヴァニアに生れ、ブランダイス大学(B・A)、ボストン大学アフリカ研究センター(M・A)、カリフォルニア大学・パークレー(ph.D)等に学び、現在クイーンズスカレッジ政治学部に所属する新進アフリカ研究者である。一九六四―五年にフォード財団の援助をえてパリおよびセネガルで調査をおこない、一九六八年にはふたたび西アフリカへ赴いたということであるから、本研究のために十分の努力がはられたのであろう。

本書の構成を目次で示せば以下のごとくである。

第一章 レオポルド・サンゴールと発展途上国におけるイデオロ

ギーの機能

第二章 変化するネグリテュードの社会的機能

第三章 フランスとセネガル——従属国に対する植民地主義のア

ピール

第四章 自主性、ナシヨナリズム、独立

第五章 セネガル社会主義の定義

第六章 発展と社会主義

第七章 民主主義と経済発展

第八章 技術と新人道主義

なお巻末には、実に四九頁におよぶ文献目録がけられていて極めて有用である。

二、それでは、著者が本書のながでいかなる議論を展開しているかを、簡単に紹介しておこう。

著者はまず、当然の順序に従つて、発展途上国におけるイデオロギーの機能ないし役割を論ずることからはじめる。著者によれば、発展途上国におけるイデオロギーの役割は、国内的な統一、安定、経済発展を促進することである。これら発展途上国で発展を始発させるには、なによりもまず大衆を無関心の眠りから呼びさまし、これらに自覚をもたせ、かつこれらの活動を一定の目的へむけて整合しなければならぬ。そしてイデオロギーは「広範な無関心」に対

する精神的闘い、「精神的緊張」を生みだす努力における、主要な手段だと著者はいうのである。しかしイデオロギーの役割はむしろそれにとどまるものではない。すなわち発展の方向を定めること、発展を可能にする装置の創出、発展のための活動に参加する大衆に一定の行動様式を教えこむこと、などもまたイデオロギーの重要な役割である。そして著者はイデオロギーの担うこうした役割を五段階にわけて説明している。①知識の蓄積、②こうした知識を明示する能力をもつた人員の教育、③農民に刺激をあたえて技術者からつたえられる知識の受容を可能にすること、④農民の実験への意欲を助長すること、⑤農民をして革新の組織的利用に積極的たらしめること。

ところで、サンゴールの主張するイデオロギー（ネグリテュードのイデオロギー）は、右のような役割を十分にはたしたたであろうか。著者の答えは否である。ネグリテュードのイデオロギーは、初期の極度に思弁的なものから幾分とも実践的なものへ——人道主義の教育を受けた知識人層にもつともアピールする抽象的なものから、科学・技術に対する新たな実用主義的傾斜へ——と変化をとげはしたものの、それはセネガルの大衆にはなく、技術エリート、行政エリートにアピールしたにすぎず、大衆の政治参加を刺激するにはいたらなかつた。先述の段階論にあてはめれば、②の段階までしかいかなかつたことにならうか。

それはいつたいなぜか。この問題を追究するにあつて著者は、ネグリテュードのイデオロギー的發展を歴史的に検討しようと試み

ている。著者によれば、ネグリテュードは歴史的に三つの段階にわけて把握することができる。第一の段階は一九三〇年代から第二次大戦までの時期である。この時期においてパリに集つていた若い黒人知識人のあいだにネグリテュードの概念が生まれたが、かれらがこれによつて確立しようとするものは、個人的主体性であつた。すなわち発生期のネグリテュードは、あくまでもパーソナルな次元に位置してしたのである。

ついで第二段階は第二次大戦からセネガルの独立（一九六〇年）にいたるまでの時期である。この時期にあつてサンゴールは、前述のようにフランス第四共和制のための制憲會議にセネガル代表として参加し、フランス本国とその植民地の關係を規定する任務の一端を担つたが、そうしたかれの立場がネグリテュードを民族的主体性のイデオロギーへと発展させるいたつた。

第三の段階はセネガルの独立以後の段階であつて、この時期にはいるとともにネグリテュードは、統一、經濟發展、文化的成長のイデオロギーへと脱皮をとげた、というのである。

しかしそれにもかかわらず、前述のようにネグリテュードのイデオロギーはセネガルの大衆の政治参加を生みだすにいたつていない。それはひとつにはかれが「妥協の政治家」であつて「闘争を信条とする政治家」ではないからであり、またひとつには、かれが本質的に「エリート主義者」だからである。

サンゴールは他のアフリカ社会主義者と同様に、アフリカにおける共同体的伝統の現代的復元を唱えるが、そのなかでかれがとくに

強調するのは「人間相互の靈的交わり」とかれが表現するところの精神的伝統の復元である。そうしたかれの姿勢からは、大衆からのつきあげを原理的に承認するような「大衆路線」の政治への傾斜は生れてこない。かれはまた、集団（あるいは階級）間の対立が發展を促進するという見解もとらない。かれは、革命的なクライメートのなから生れ革命的なクライメートを育てる大衆路線をとるよりも、いいかえれば革命の変革よりも、集団間の妥協に基礎をおく進化的政策の方を好んで採用するのである。そしてサンゴールは、とくにこれまで伝統的な宗教指導者や商人の集団との妥協に力点をおいてきた。そして、さらにこのことは独立以後のセネガルの政治状況からすれば、かれの政權維持に必要不可欠だったのである。

しかし、今後もサンゴールのイデオロギーは（農民）大衆との接点をもととしないであろうか。著者はこの点については、つぎのように見ている。すなわち、ネグリテュードのイデオロギーはセネガル社会主義を媒介として、大衆にアピールするものへと發展するのである。だが、それは大衆の政治参加を唱道することはないであろう。そしてそれにもかかわらず、ネグリテュードのイデオロギーおよびそれを基礎としたセネガル社会主義は、統一、安定、經濟發展のイデオロギーとしての有効性を、セネガルの状況のなかでは維持しうるであろう。

一方で以上のように見ながらも著者は、他方でサンゴールの思想と計画がもつているふたつの欠陥を指摘している。ひとつは、かれがいかにアフリカの伝統的価値を強調し、その現代的復元を志向し

たところで、サンゴールの思想は所詮西欧文明に根ざしたものであり、西欧的思考様式をもった相手にしかコミュニケーションできないという点、したがってサンゴールは特殊アフリカの発展の道をたどることはできないであらうということである。第二は、その意図しないにもかかわらず、セネガルは近年、徐々に権威主義への傾斜を強めているということである。もつとも、後者については、著者の説明はかならずしも十分ではない。

三、以上本書について極く要点だけを紹介した。ここで若干の読後感を述べればつきのごとくである。まず、著者が極めて抽象度の高いネグリテュードのイデオロギーを現実政治との関係において把握し、十分な説得力をもつて議論を展開したことは敬服に値する。第二に、ネグリテュードの発展を三段階的に把握し、それとの関係で各段階において西欧世界に身をおいたアフリカ知識人の文化的対応、政治的対応の次元の相違を明確に指摘したことは、極めて示唆的であつた。こうした長所は、類書が少いことと関連して、いつそ光彩を放っている。本書はサンゴール研究、ネグリテュード研究において重要性を担うばかりでなく、アフリカにおけるイデオロギーの研究、いやイデオロギー研究一般においても、十分な存在理由をもちうるであらう。

(一) サンゴールの経歴 *Ronald Segal, Political Africa. A Who's Who of Personalities and Parties*, New York: Praeger, 1961, pp. 240-242. *Segal, African Profiles*, Middlesex, England.

Penguin Books, 1962. アフリカ協会訳『アフリカの横顔』・昭和三十九年・時事新書・下巻・一三二―一四四頁に詳しい。

(二) L.S. Sanghor "Negritude and African Socialism" in *African Affairs*, No. 2 (St. Antony's Papers No. 15), London: Chatto & Windus, 1963, p. 11.

(三) Cf. Andrain, "Democracy and Socialism: Ideologies of African Leaders" in David El. Apter, ed., *Ideology and Development*, Illinois: Free Press of Glencoe, 1964. 小田英郎訳「民主主義と社会主義——アフリカ指導者たちのイデオロギー——」(アプター編・慶大地域研究グループ訳『イデオロギーと現代政治』・昭和四十三年・慶応通信・所収)・一九一―一九五頁を参照。

(一九七〇・一一・一六)

(小田 英郎)

ウォルター・アルマン著

鈴木 利章 訳

『中世における個人と社会』

本書は W. Ullmann: *The Individual and Society in the Middle Ages* (The Johns Hopkins Press, Baltimore, 1966) の翻訳である。

一般に思想史の流れにおいて「個人」とはあのルネサンス、宗教改革において自律し、学問上の市民権を獲得した概念であり、「近代」の成立を抜きにしては概念せられないものであつた。この